



学校名：埼玉県比企郡川島町立ハッ保小学校

氏名：菅原 千絵

[担当教科：全教科]

● 実践教科等：総合的な学習の時間

● 時間数：8時間

● 対象生徒：5年生

● 対象人数：14人

1 単元名

「川島町から世界に発信！」～モンゴル＆日本～

2 単元の目標

- ・世界の多様な文化・生活を知り、類似点・相違点に気付き、外国への興味を持つ。
(進んで参加する態度)
- ・世界の児童たちの現状を知り、自分に何ができるかを考えることができる。
(未来像を予測して計画を立てる力)
- ・世界との貿易や工業生産について知り、世界の実情を理解する。(多面的・総合的に考える力)
- ・違いを認め合いながら、豊かな人間関係をつくるための行動目標を自己決定できる。
(つながりを尊重する態度)

3 ESD(持続可能な社会づくり)の視点

多様性	相互性	有限性	公平性	連携性	責任性
-----	-----	-----	-----	-----	-----

- ・モンゴルと日本の文化や生活の類似点・相違点に気付く。(多様性)
- ・貿易及び工業生産を通して、日本と世界はつながっていることに気付く。(相互性)
- ・互いの違いを認め合い、自分と異なる意見や立場を大切にしながら、自分にできることを考える。
(連携性)

4 単元の指導について

(1)教材観

本単元では、モンゴルの生活や地理的環境、工業生産などを通して、世界の実情や日本と世界のつながり、日本との類似点・相違点について理解を深めながら豊かな人間関係を構築する素地を養うことをねらいとしている。

本校は、開校百二十余年を数える伝統校である。学区内は田園の中に集落が点在する伝統的な農村地帯で、豊かな自然環境に恵まれている。

一方で、平成20年には圏央道(首都圏中央連絡自動車道)川島インターチェンジの供用が始まり、田園環境と調和した産業基盤づくりとして郊外型商業施設やインター産業団地を整備している。このように、社会の様相が変化している中、変化に柔軟に対応する力を育成することが求められている。

一人一人を大切にする気風の中で、児童は伸びやかに育ち、豊かな体験活動を通して、確かな学力と健やかな心と体を身につけるよう取り組んでいる。また、地域の温かい思いを受け止め、元気に学校生活を送っている。

一方で、多様な価値観を認め合いながら豊かな人間関係を築くことに課題がある。モンゴルの様子から、世界の国々の暮らしや文化の違いを見つめ、学ぶことで多様な見方や考え方を育むためにふさわしい教材である。モンゴルという国、文化に触れて、日本との違いを「楽しい」「おもしろい」と感じるように展開し、興味を持たせていく。そして、日本がモンゴルを始めとする開発途上国といわれる国々に対して行っている支援・協力活動は、一方的なものではなく、将来、世界中の人々のためになる強い繋がりのあるものであることを考えさせていきたい。

(2)児童観

本学級の児童は、新しい知識や考えを知ることに興味を持って取り組む姿が見られる。外国語活動では、英語を話したり、様々な国の言葉や文化を知ったりすることにとても意欲的である。社会科では、国旗や国名に興味のある児童や、外国の食文化や生活習慣の違いに興味を持ち家

庭学習で調べてくる児童が見られる。

学校生活に関するアンケートの結果や日頃の生活の様子から考えると、児童間の関係は概ね良好であるといえる。しかしながら、少人数、変化の少ない人間関係から、友達と比較したり、「あの子には何をやってもかなわない。」と最初からあきらめてしまったりする児童もいる。周囲から認められることにより自分のよさに気づき、自信を持つことができるようになると考える。一人ひとりが素晴らしい個性を持った存在であり、自分のよさや可能性を大切にしていこうとする心情を高めたい。そして、今後、新しい環境になっても、変化に対応しながら豊かな人間関係を築くことができるようになってほしいと考え本単元を設定した。

(3) 指導観

5年生の発達段階として、個人差はあるが以下の特徴があげられる。

- ・知的欲求が高まり、表面的な楽しさだけでなく、興味関心のあること、考えて行う活動に興味を持つようになる。
- ・抽象的な内容を分析して理解することができる。
- ・物事を論理的に思考する力を求めるようになり、知識を体系化する能力が高まってくる。
- ・思考の範囲が広がり、日本からさらに世界への関心を持つようになる。
- ・マスメディアからの情報を正確に理解し、推理する力が高まる。
- ・広い視野を持って自らの個性を探る時期になる。

身体も大きく成長し、自己肯定感を持ち始める時期であるが、反面、発達の個人差も大きく見られることから、自己に対する肯定的な意識を持てず、劣等感を持ちやすくなる時期でもある。

社会科を始め、各教科や道徳の時間を中心に、「児童たちの自己肯定感を高め、未来に夢を持てる児童を育成すること」を目指してきた。このような時期の児童にとって、本単元は抽象的な思考への対応や他者の視点に対する理解にふさわしいと考える。自他の尊重の意識や他者への思いやりなどの涵養にもつなげていきたい。

教師海外研修に参加し、共生社会の中で生きていること、日本と世界は相互関係にあることを実感した。世界の実情を知り、考えることで、将来にわたり国際貢献に取り組む児童の育成につながると考える。国際理解教育がねらいとする、「広い視野とともに、異文化に対する理解や、異なる文化を持つ人々と共に協調して生きていく態度を育成する。」ことは、違いを認め、そして豊かな人間関係を育むことにつながると考えた。日本は様々な形で国際貢献を行い、共生社会の中で生きていくことを伝えていきたい。自分自身が実際に見学して受けた感銘や実感したことを児童に伝え、これからの未来を創る児童が社会への希望、興味・関心を持つきっかけづくりとしたい。

5 評価基準

観点	世界の多様な文化・生活について興味・関心を持って取り組む。(関心・意欲・態度)	世界の現状を知り、自分にできることを考える。(思考・判断・表現)	フォトランゲージを通してモンゴルと日本の共通点・相違点を見つける。(技能)	世界との貿易や工業生産あんど日本とのつながりについて理解する。(知識・理解)
評価規準	世界の多様な文化・生活について知り、自分と同じところ、違うところに気づき、外国への興味を持って学習に参加している。	世界の実情を知り、自分にできることを考え、発表したリワークシートに書いたりしている。	日本とモンゴルを比較して見つけた共通点・相違点を書いたり発表したりしている。	世界との貿易や工業生産など日本とのつながりについて理解している。
評価方法	学習の様子 発言 ワークシート	学習の様子 発言 ワークシート	学習の様子 発言 ワークシート	学習の様子 発言 ワークシート

6 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	世界の国々を知ろう	世界の国々に目を向け、興味・関心を持つ。	・世界地図を用いて世界の国々を知る。
2	モンゴルを知ろう	モンゴルの写真や遊びを通じてモンゴルという国について知る	・モンゴルの写真を見たり、クイズに答えたり、話を聞いたりして、日本との共通点・相違点について知る ・モンゴルのじゃんけんゲーム、伝統的なおもちゃ「ジャガイ」をして遊びを体験する。
3	モンゴルを知ろう、味わおう	モンゴルの伝統的なお茶「スーテーツアイ」を通して、食文化や生活習慣にふれる。	・モンゴルのじゃんけんゲーム、伝統的なおもちゃ「ジャガイ」をして遊びを体験する。 ・「スーテーツアイ」を試飲する。
4	違いについて考えよう。	食文化の違いや多様性について考える。	・嗜好と健康の視点からお互いの違いを認めること、生活習慣の違いを理解すること、共通点を探すことについて考える。
5	モンゴルの子供の様子について知ろう	モンゴルの学校について知る。日本が行っている支援活動について知る。	・学校の様子や子供の様子を知る。 ・日本が支援活動を行っていることを知る。
6	日本が行っている支援・協力について考えよう。	海外で活躍する日本人の姿や国際社会での日本の役割を知り、国際協力の大切さをしる。	・モンゴルで活躍する日本人ボランティア・専門家の活動を通して、JICAには技術協力と資金協力があることを知る。 ・日本が国際的な支援・協力によって復興できたことを知る。 ・日本の協力がどのように持続可能な生活の向上に役立つか考える。
7	青年海外協力隊の活動について知ろう。	JICAのボランティア活動について知り、日本が行っている国際協力について考える。	・ゲストティーチャーによる話から、青年海外協力隊の活動について知る。
8	日本が、私たちができることを考えよう。	・JICAの活動が、どのようにして持続可能な社会づくりにつながるかを考える。 ・自分にできることを考える。	・支援活動・協力活動がどのような成果を上げ、持続可能な社会づくりに役立つのかを考える。 ・3学期に自分が考えたり、調べたりしたいことをの計画を立てる。

7 授業事例の紹介

小単元名【日本が行っている支援・協力について考えよう】

(1) 指導案

(ア)実施日時 12月15日(火)第5限

(イ)実施会場 5年生教室

(ウ)本時の目標

・モンゴルで活躍する日本人に関心を持ち、資料などから意欲的に調べたり考えたりする。

(関心・意欲・態度)

・日本の技術協力や支援の仕組み・必要性について考える。(思考・判断)

(エ)指導のポイント

- ・日本らしい支援の在り方が協力であるということに気付かせる。支援や協力が持続可能な社会づくり、共生社会につながることをおさえる。
- ・日本も支援を受けてきた歴史があることを知り、支援・協力とは一方的でないことを知る。

- ①「新ウランバートル国際空港建設サイト」を教材とする。海外派遣研修で撮影した新ウランバートル国際空港の建設サイトの写真や、動画を用いる。社会科の学習と関連させながら、日本の高い技術力を生かした日本らしい協力の仕方について考えさせる。そして、写真から考えたこと、気付いたこと、想像したことを発表し、視覚的な面から児童の思考を深めさせる。
- ②児童の多様な考えを引き出すためにワークシートを活用する。少人数であることのよさを生かし、全員の考えや感想を発表させる。
- ③グループでの話し合い活動を通して、互いの意見を交流させる。
- ④戦後の給食の様子や東日本大震災後にモンゴルから受けた支援について写真を用いて紹介する。日本が受けてきた国際支援・協力の上に、現在の日本があることに気付かせる。そして自分自身の生活が共生社会の中で成り立っていることを考えさせる。

(オ)本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
導入 5分	学習課題提示	①モンゴルの小学校建設には日本が関わっていたことを確認する。	一斉	・前時を想起させる。	
展開 30分	めあて：日本がモンゴルに行っている支援・協力について考えよう。				
	海外(モンゴル)で活躍する日本の技術、日本人について知る。活動について考える。	②支援と協力について知る。 支援は「励ましながら助けること」協力は「力を合わせること。」という意味を確認する。 ③新ウランバートル空港建設に日本が支援・協力をしていることを知る。 どんな支援・協力をしているか考えて発表する。		・国語辞典で調べさせる ・気付いたこと、わかったことはワークシートに書きこませる。 ・新ウランバートル空港建設サイトの様子を写真・映像で紹介し、以下のことを説明する。 (新空港建設に関して) ①モンゴル、韓国、日本が協力して建設していること②円借款プロジェクトであること③モンゴルの自然環境に配慮しながら建設に取り組んでいること。 (モンゴルの希望) ①日本の技術(コンクリート、ガラス、自動車、機械など)②日本人の建設技術(大工さんの高い技術)③メイドインジャパンの製品に対する強い信頼	日本の支援・協力について考えている。(発言・ワークシート) 日本とのつながりについて考えている。理解している。(発言・ワークシート)
まとめ 10分	日本も支援を受けていた歴史について知る。	④なぜ、日本は支援・協力をしているかを考える。 ⑤日本が戦後に受けた支援、東日本大震災後に受けたモンゴルからの支援について知り、国際協力の必要性を考える。	グループ 個人	・写真をもとに、戦後、支援を更けて復興し、経済を発展させて今の日本があることを説明する。 ・東日本大震災後、モンゴルから受けた支援について知らせる。	支援の仕組み、必要性について考えている。理解している。(発言・ワークシート)
	本時の学習をまとめ、次々の展開を予告する。	⑥感想を発表する。	一斉	・支援・協力が持続可能な社会づくり、共生社会につながることをおさえる。	

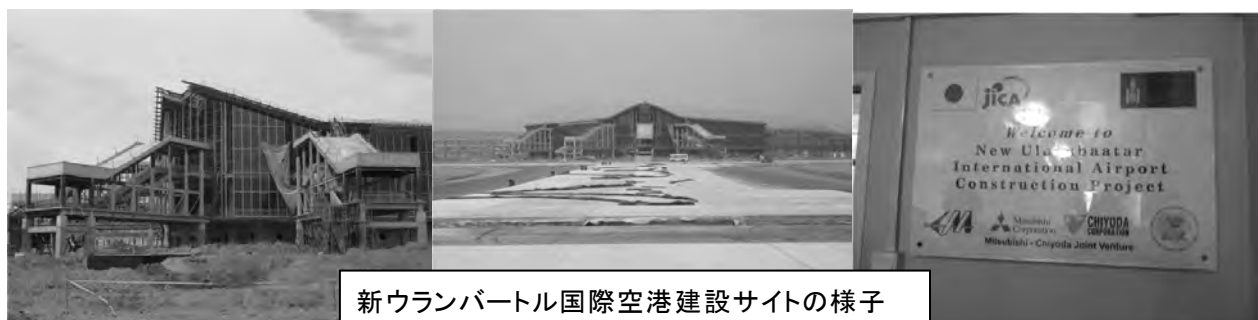
(2)授業の振り返り

(良かった点)

- ・日本らしい支援の在り方が協力であるということに気付き、支援や協力が持続可能な社会づくり、共生社会につながることを理解していた。
- ・写真や映像を活用したことにより、興味・関心を持って意欲的に学習に取り組むことができた。
- ・新ウランバートル空港建設サイトを中心教材としたことにより、社会科での工業生産の学習につながった。
- ・学習内容を生かし、発展させながら考えることで話し合いを深めることができた。
- ・全員が積極的に自分の意見を発表できた。さらに、お互いの意見を聞き合うことで、様々な立場、視点から物事を考えたり、共通点・相違点を見つけたりすることができた。

(改善点とその具体的な改善策)

- ・お互いの感想を交流したり、考えを深め合ったりする時間を十分に持つことに課題が残ったため、次時に行った。



(4)参考資料等

- ・外務省「外交政策ODA(政府開発援助)」
<http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/hanashi/story/1_2.html> (2015年12月1日アクセス)
- ・国立教育政策研究所教育課程研究センター
「総合的な学習の時間における評価方法等の工夫改善のための参考資料(小学校)」
<http://www.nier.go.jp/kaihatsu/hyouka/shou/01_sho_sougou.pdf?time=1452072290524>
「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料(小学校 社会)」
<http://www.nier.go.jp/kaihatsu/hyouka/shou/02_sho_shakai.pdf?time=1452072536028>
(2015年12月1日アクセス)

8 単元をととした児童の反応/変化 <児童の感想から>

(1)モンゴルの子供たち、学校の様子を調べて

- ・モンゴルの人が喜んでくれると、日本の工業をやっている意味があると思う。
- ・日本とモンゴルがもっと仲良くなったらいいなと思った。モンゴルの学校は日本と似ていたのびびっくりした。
- ・ぼくは、モンゴルが日本のことを好きだと知って、日本のことを誇りに思う。

(2)国際協力や、世界の人々とつながるために必要なこと

- ・相手の国について調べたり、日本の文化や歴史を教えたりする。
- ・日本、埼玉、身近にいる外国の人と進んでふれあい、コミュニケーションを取り交流を深める。
- ・日本の文化について知ること大切だと思う。
- ・国際支援の方法をもっと詳しく調べて自分たちにできることを考える。

(3)文化や生活習慣がちがう国の人々と仲良くするにはどうしたらよいだろうか

- ・相手のことをよく知れば仲良くなれる。相手にも理解してもらえるように説明する。
- ・日本のことをもっと教えてあげたり、その国のことを教えてもらったりすれば仲よくなれると思う。
- ・「そうだよね。」と違いを認める。
- ・違いがあっても楽しい思い出をつくることができれば、仲良くなると思う。
- ・気が合うことを見つけ交流を深める。自分を知ってもらい、相手のことをよく知る。
- ・相手のことを考える。話し合う。そして、相手の気持ちをわかることが大切だと思う。
- ・外国と日本の文化をくらべる。お互いのよいところを伝えることで友達になり、絆が深まると思う。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

自分の目で見えてきたことを語ることで説得力があり、児童の心に響く授業実践となった。ビデオや写真はとても有効な手段であった。実践前、何を教材として扱うか厳選するのに迷い苦労した。自分の選ぶ課題や写真によって児童の考え方が左右されてしまうと考えたからである。自分の伝えた内容がよかったか不安も残る。授業実践を通して、児童に伝えたいこともたくさんあったが、児童に考えさせる場をより大切にしたいと考えるようになった。お互いの感想を交流したり、考えを深め合ったりする時間を十分に持つことに課題が残った。考えることを通して児童のこれから人生の糧の一つとなることを期待する。

(本單元におけるPDCAサイクル)

P(計画)指導計画を立て、授業のねらいを明確にして指導案を作成した。

D(実施)ねらいを達成するために、写真、動画等を活用して実施した。具体物を教材として多く用いたり、掲示したりするなどして学習内容を身近に感じられるようにした。

C(検証)発言内容やワークシートの内容を丁寧に読み取り、思考の状況を確認した。

A(改善)これらの学びを行動に結びつけていくこと。3学期に引き続き取り組みを行い、自分たちにできることについて考え、深めさせていく。

10 教師海外研修に参加して

(仲間からの学び・出会い)自分と同じように在外教育施設派遣を経験した仲間、他県から参加している教員と出会い、ネットワークを広げることができた。経験を共有したり、様々な視点からの意見を聞いたりしてより研修を深めることができた。

(モンゴルという国を肌で感じる事ができた)実際にモンゴルに行ってみると自分の想像以上のものがたくさんあった。居心地のよさは出会った方々の優しさ、穏やかさ、明るさを肌で感じる事ができたからだと思う。肌で感じたモンゴルという国や日本とのつながりを大切にしていきたい。

(日本を出てからわかる日本のよさと課題)短期間であったが、日本という国を外側から見直す貴重な機会となった。あらためて日本の文化、魅力、技術の高さなどを再確認できた。一方、考えなければならない課題も見えた。モンゴルでは、夢や目標を持ち、将来は国に役立つような人材になりたいといった向上心を持っている人々に出会った。今、自分が関わっている未来を担う児童が夢や希望を持てるような教育活動、社会構築が大切であると感じた。

(日本らしい支援の仕方)日本が行っている、相手国のことを考えた思いやりあふれる支援活動は、教師が児童に対して行う教育活動に通じるところがあると感じた。児童一人ひとり見つめ、可能性を見出し、よりよい変容のために長期的な視点を持ち、それぞれに合った丁寧な支援を継続して行うことが何よりも大切だと思うからである。

(本当の豊かさとは)日本に興味・関心を持ち日本語を熱心に学習している高校生に出会った。オルホン渓谷で、当たり前のように家の仕事を手伝い一生懸命働く子供たちに出会った。その姿は凛々しく輝いていた。モンゴルの未来は明るいと確信できる姿であった。インターネットや携帯電話が当たり前の時代に誕生した現代の日本の児童に、豊かな生活というのはどういうものなのかを、人とのつながり、共生社会の中で生きることを通して考えさせていきたいと思う。